

小美玉市の歴史を知ろう39

水戸藩内の窯業（やきもの）——「小川焼」——

文政十二年（一八二九）、第九代水戸藩主に就任した徳川斉昭公は、人事刷新を断行し、改革派の藤田東湖や会沢正志斎を郡奉行に登用するなど藩政改革に着手しました。さらに、財政難を解消するため、新たな産業を興す「殖産興業」を推し進めました。そのひとつに、窯業（やきもの）があります。

陶土を発見した常陸太田の町田村、下野の小砂村にも陶製所が開設され、先の七面陶製所と合わせて、藩が直接的に窯業を経営する「藩窯」が成立しました。

一方、民間が経営の主体となる「民窯」もあります。水戸藩の藩窯成立に先行する寛政ノ享和ノ文化年間（約二一〇年前）に開かれた「松岡焼」（北茨城市）、相馬焼から技術を導入した「桃源焼」（常陸太田市）がそれにあたります。他藩ですが、笠間焼などの民窯では財政に貢献が期待されるため、藩の援助を受けることもありました。

昭公は、藩内のやきもの土「陶土」を探させ、常陸太田の町田村と下野の小砂村で発見しました。天保四年（一八三三）には、水戸下市の瓦屋（谷）に陶器製造所を開設したとされています。天保九年（一八三八）、瓦屋の陶製所を統合する形で千波湖近くの神崎七面堂の下に七面陶製所を設置しました。なお、天保十三年（一八四二）には、七面陶製所の北側の台地に偕楽園が開園しました。その後

徳川光圀公の時代、中国・明より招いた儒学者朱舜水が陶工を連れてきて、藩内の小川村で「どびん焼」と称するやきもの生産を始め、その後、真偽は不明ですが、六戸に移ったとの説があります。昭和五十年代にこの「どび

ん焼」の所在を確認するため、登窯があったと言い伝えがある小川総合支所の南側、小川字恵比寿に所在する斜面部で試掘調査を実施しました。ここでは、調査で出土した遺物を紹介していきます。

写真1は、窯道具と呼ばれるサヤ鉢と焼台です。窯道具とは、登窯の中で使われる道具の総称のことです。窯道具が出土したことは、やきものを焼いた窯が所在していたことを示しています。サヤ鉢は、灰がかぶることを防ぐための容器で、焼台は文字通り、窯の中で陶器を乗せる台のことです。

写真2は、色見穴の蓋です。色見穴とは、窯内の焼成状況を確認するため、焼成室に設けられた小穴のことです。写真3は、窯で焼かれた製品で陶器の甕と搦鉢です。窯道具や窯で焼かれた製品

の特徴が、七面陶製所などの「藩窯」とは違うことから、この窯跡は、十九世紀に操業していた「民窯」であると推察されます。つまり、伝承がある光圀公の「どびん焼」とは異なり、文献にも残っていないことから、「小川焼窯跡」と名づけられました。



写真3
甕・搦鉢

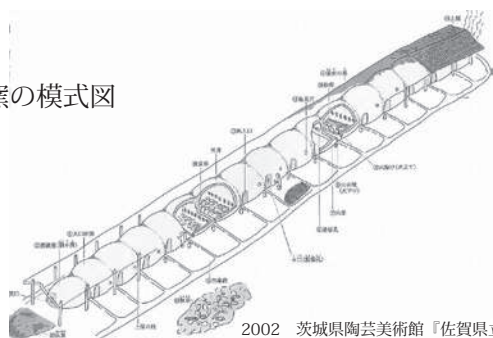


写真2
色見穴の蓋



写真1
サヤ鉢・焼台

登窯の模式図



2002 茨城県陶芸美術館『佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 古伊万里 その美と変遷』より



昭和50年代の小川焼窯跡の遠景